



祖父が入門後押し (下)

8 番相撲を見に上京

69連勝の双葉山は「大双葉」と呼ばれ、立浪部屋から引退後独立。古巣とは一線を引き、双葉山道場として津風部屋を創設した。柏戸の祖父・蔵人にしても、現役時代の栄光を知っておりファンだった。そして孫・剛が昭和29(1954)年秋、一門の伊勢ノ海部屋に入門した。その相撲部屋は土俵がないため、連日時津風部屋に出稽古に赴いている。「孫の様子が気になる」と翌30年の初場所、当時8日制だった最後の相撲を見るため東京・蔵前国技館に出掛けることを急ぎ決めた。初日は敗れたがその後6連勝と快進撃を続け

「それなら俺がいつちよう様子を見に行こう」となったのだ。同行させたのは剛の長兄・勝だった。日露戦争に出征、海を渡ったこともある蔵人だが、山形を出るのは本場に久しぶり。「孫は楽しんだが、やはり生の双葉山を見るのが楽しみだのう」好奇心があれ、期待に胸が膨らんだ。当時76歳。茅葺き職人であり、自ら育てた果物を売

ていた。

番付に「富樫」の名前で

丸餅抱え夜行列車に

「入門したての弟子の祖父が上京する？」時代柄もあって師匠・伊勢ノ海親方は驚いたが、実際入門させた剛少年は思った以上の大器だったこともあり、力士と二緒の部屋でのちゃんこではなく、夕食は自室に招

まだ「体験入門中」との認識もある。ちよっとしたき

それらに比べたら、当時の剛少年はまだ子どもだったかもしれない。そのため同じ山形(鶴岡市上郷地区)出身で五歳上の兄弟子・柏森(弭間幸雄)を案内人と

もう一つは時津風部屋の稽古場に双葉山は現れなかつた。

◆双葉山 12回の優勝中全勝が8回。前人未到の69連勝中は国内を熱狂の渦に巻き込んだ。終戦の20年引退。時津風部屋を創設し大関北葉山、豊山らを育て、相撲協会理事を務めた。昭和43年、56歳で死去。



蔵前国技館前で。左端柏森は幕下で足袋に雪駄で羽織姿。剛は素足に下駄。右端蔵人(勝撮影)

「剛くんは大丈夫です。部屋環境にも慣れてきたし、強くなりますよ」と説明にこれ努めさせた。これに蔵人は「あなたみたいな先輩がいてくれて安心した。これからも頼みます」と託した。

ただこの旅行で2つの誤算があった。楽しみにしていた8番相撲で剛は敗れ、6勝2敗に終わってしまった。

毎週火曜日付に掲載



双葉山が表紙のサンデー毎日別冊・昭和16年春場所展望号。新聞社系の雑誌は相撲別冊を競い合った

りさばいたことで、それなりの蓄えもあっての上京。「部屋皆さんへ」と自分が作った標の白に杵で掲げた丸餅をいっぱい抱えて夜行列車に乗り込んだ。

北葉山も中学卒業後、室蘭の鍛冶屋に3年勤め、金をため上京、不転の決意で力士になっていた。

柏森が蔵前に案内

2つ誤算も安心帰郷

敬称略